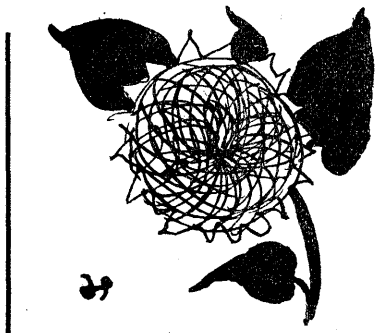
言葉と知能

〈下〉

村山貞雄



9 精神薄弱児と言葉

知能の低い幼児は、その会話を観察すると、種々の特徴がみられる。

精薄幼児の言葉の特徴として、つぎのことがあげられる。

一、話の内容がまとまらない。

これは、意味のまとめ方そのものが、べたなことにもよるが、このほかに思ったことをうまく表現できないこともその原因になる。

内容のまとまらない話し方の例をあげるとつぎのようである。

〔話し方のまとまらない例〕

K・T　知能指数五十一　つぎの言葉は辨当を持って来なかったK・Tが、もうお昼間近かになったので、辨当が届くはずだが、まだ届かないということを、先生に訴えているものである。

「先生あとから、先生かず子きょうおべんとかず子持って来なかったのよ、早く来なあかなー、早くかず子も、かず子はねー、かずこー、先生かず子先生かず子、かず子持って来なあー、かず子。」

二、話の内容がよく変わる。

普通の幼児も、話の内容はよく変わるが精薄幼児は特に、思考の内容がよく変化する。逆に感情が固執することもみられる。

三、話しぶりが幼稚である。

知能指数十九から六十六までの精薄幼児十七名について、幼児が自由遊びをしているときに、十五分間ずつ日を変えて二回、一人につき合計三十分間観察記録したところ、主語と述語があるいわゆる完全な文のかずは、全体の七・四パーセントであった。これにたいして、条件児として、知能指数九十七から百三までの幼児を十一名まったく同様な方法で観察記録したところ、主語と述語のある文は、全体の十二・四パーセントで、普通児のほうが、精薄児より五パーセント多かった。

幼稚な話しぶりの例をあげると、つぎのようである。

〔幼稚な話し方の例〕

例一　K・H　知能指数四十五

「じゃー？（あけていいか？）、ほや（ほら）、ブーブー（自動車）、うん？うん？うん？（やっていいか？）、えっぽいね（一杯）、えっぽいね、あ？（えっ？）、う？ほや（ほら）、やまやま、こえ（これ）、うー、ブーブー（自動車）、ブー、ない、えっぽい（一杯）、ほや（ほら）、ゴァー（汽車）、ブーブーえっぽい（自動車が一杯ある）、ぽーぽー（乗せてくれ）、ない、えっぽい、えっぽい、ほや、あー（取ってくれ）、ブーブーあー（自動車を取ってくれ）、ブーブー、ポッポー。」

（以上十五分間）

例二　S・T　知能指数二十四

「かいちゃった、かいちゃった、おん（クレヨンの箱にクレヨンをおしこむ）、あえー、おん、あとぼ（遊ぼう）、なあに、なあに、あんだ（なんだ）、でた、ごっとうたま（おしまい）、おあぁたん（おかあさん）、あとぼー、あとぼー、おねえちゃん、ちぇんちぇー（先生）、あとぼ、いこよ（行こうよ）あい（はい）、あえ（あれ）、やって、ないちょないちょ（内証、内証）、ちぇんちぇ、だめ、だめでちゅ、たいちょたいちょ（体操、体操）おい、これ、ゆきゆきのやま（雪の山）、おあぁたーん（おかあさん）、ちぇんちぇー、こい、おい、ちぇんちぇー、あちゃまいあちゃまい（おしまいおしまい）、ばいばい、ね、おいで、アトポッポー、アメー。」（以上十五分間）

四、身ぶり手ぶりが多い。

身ぶりや手ぶりの多い話し方の例をあげると、つぎのようである。

〔身ぶり手ぶりの多い話し方の例〕

U・O　知能指数三十五　U・Oは「こう」と言いながら、ほとんど身ぶり手ぶりで話していた。

「先生こう、こうこう、ねんねだねんねだ、ねーちゃん、ねむれ、だー、おねえちゃんここ、うぁん、ねえちゃんこう、ねえちゃんこう、こう、ゆき（自分の名前）こう、ねえちゃんこう、ねえちゃんこう、よ、ねえちゃん、こうちてるの（こうしているの）ねえちゃん、よじゃよちゃん（友だちの名）ないてるほら、ある、ようちゃん、いちゅ（椅子）、こうこう、おねえちゃんもほら、こうやる。」（以上五分間）

なお精薄幼児は、身ぶり手ぶりが多いと同時に、話し方の内容に抽象性が少ないのが特色である。

五、あまり話そうとしない。

前述の調査の結果によると、精薄児は、普通児の約半分しか話しておらず、両者のあいだには、五パーセント以下の危険率で有意差がみとめられた。（一表参照）

なお、精神薄弱児のなかには、よく話す者がある。たとえば、絶えず人に話しかけている者もある。

一表　文のかず

	$\bar{x}$	σ
精薄児	16.2	18.2
普通児	30.0	11.5

六、ひとりごとを言う。

精薄幼児は一般に友だちと話すことが少なく、おとなと話すことが多い。たとえば教師や外来者によく話しかけ、友だち同志では話すことが少ない。前述の調査で三十分に話した文のかずの平均を示すと、二表のようである。

また、話す相手のことを、特に相手の感情をあまり考えない。

七、文章がみじかい。

前述の調査で、一文中の語数を示すと、三表のようになり、○・一パーセント以下

二表　精薄児の話し相手

話し相手	普通児 $\bar{x}$	普通児 σ	精薄児 $\bar{x}$	精薄児 σ	備考
先生と話す	2.2	3.2	4.6	6.5	0.3>P>0.2
友だちと話す	18.1	14.6	2.1	2.1	P<0.001
その他の人と話す	0.0	0.0	1.3	6.0	0.01>P>0.001
ひとりごと	1.4	2.5	5.1	3.3	0.01>P>0.001

三表　一文中の語数

	x	σ
普通児	2.06	0.65
精薄児	0.99	0.59

の危険率をもって有意差があった。

八、語彙が少ない。

これは大きな特徴であった。たとえば、この調査で或る幼児は、なにごとのおわりでも「ごっとうたま」といい、口のことをあなといっていた。

精薄児と条件児の語数と語彙数をしらべた結果は四表のようである。この表ののべ語数は、自立語（助詞、助動詞、融合形を除いたもの）のみである。

四表　のべ語数と語彙数

		のべ語数	語彙数
普通児	$\bar{x}$	63.4	45.9
	σ	42.4	15.1
精薄児	$\bar{x}$	21.1	12.1
	σ	23.2	12.7
備考		0.01>P>0.001	P>0.001

九、自分だけの言葉をつかう。

文章にもひとりよがりが多いが言葉にもひとりよがりが多い。

たとえば、調査中、或る幼児はものの名前をしばしばなわもという言葉で代用したり、消防自動車のことをダイダーといったり、あのねをごぶらといったりしていた。

また音がぬけることも少なくない。たとえば、あのねがのねとなり、お山がおまとなるような例である。条件児のばあいは、音がぬけることがきわめて少なく、調査中あきらかに音がぬけた言葉を使用した者は桃色をもいといった一例にすぎない。

十、発音に変なものがあり、いわゆる舌足らずの感じがする。

まちがう発音の内容は条件児と特に異なったことはないが、まちがい方がはげしい。しばしばまちがう発音として、サ行、ハ行、ラ行、タ行などがある。（五表参照）

五表　よくまちがう発音

よくまちがう発音
さ→チャ，ア，ハ，タ
し→ヒ，エ，チャ，ヘ
せ→チェ，シェ，テ，ヘ
しょ→チョ，ヒョ
た→カ，チャ
す→チュ，ヒュ
そ←ヒョ，ト，チョ
は→ア
ほ→オ
れ→エ
ち→ティ，ヒ
ら→リャ，ヤ

十一、形容詞を使うことが少なく副詞を使うことが多い。また代名詞、動詞を話す

六表　品詞の使用度

品詞＼知能	普通児 $\bar{x}$	普通児 σ	普通児 $\bar{x}$の%	精薄児 $\bar{x}$	精薄児 σ	精薄児 $\bar{x}$の%
名詞	29.5	32.0	33	9.9	10.3	35
代名詞	8.2	4.1	9	1.4	2.2	5
動詞	14.5	7.7	16	3.0	7.7	10
形容詞	4.2	4.3	5	0.5	0.6	2
副詞	2.5	2.6	3	1.7	2.3	6
感動詞	4.5	3.0	5	1.4	1.5	5
接続詞	1.2	1.4	1	0.2	0.2	1
助動詞	5.2	3.2	6	1.7	2.3	6
助詞	15.8	8.3	18	5.1	6.9	18
融合形	3.5	1.3	4	3.5	0.8	12
計	89.1		— 100	28.4		— 100

ことが比較的少なく、融合形を特に多く話す。

前述の調査にあらわれた品詞の使用度を示すと六表のようである。

10　ろう唖児の知能

ビュラーは、乳児期はチンパンジー時代であり、人間がこの時期からぬけ出すのは言葉をつかいはじめることによってであるというが、言葉をつかいじめる時期の遅速と知能の関係は、先月号でみたところである。

ところで、幼児は知能が発達することによって言葉が発達するが、逆に言葉をつかうことによって知能が、(少なくとも思考力や記憶の技術が)発達すると考えられる。

このことは、後天的なろう児の知的特質を調査することによってもあきらかにされる。すなわち幼児は耳がきこえなくなると急速ないきおいで言葉を忘れはじめるが、言葉を忘れると同時に概念的な把握力その他がおとろえることによってわかる。

ろうの幼児の知能は聴児に比較して、一般に、つぎのことがいえる。

(1)何々することというような概念把握力がおとる。

すなわち、動詞の連体形にあたる考えが困難である。たとえば、口語(こうご)を習っているろうの幼児にたいして、ビネー式知能検査にある「つくえは何をするものですか」という問いをおこなったばあい、これにたいして、「勉強する」とまでは答えられても、「勉強するもの」という概念的な答が困難である。

(2)表面の底を流れる意味の把握力においておとる。

すなわち、個々の現象の奥にある一貫した規則や規範を抽象して考える能力が低い。(これにたいして、盲児は正確な概念の具体的な把握力がおとる。)

(3)想像力がおとる。

たとえば、口語をならっているろうの幼児にたいして、「あなたがおもちゃをこわしたらどうしますか」とたずねたばあい、「おもちゃをこわさない」と答える。「それでもこわしたら、どうしますか」と、かさねて問うと、「けっしてこわしません」という意味の答をする。このように仮定して考えるちからが弱い。

(4)語彙量が少なく、言葉によって知覚を概念的に記銘できないために、記憶力が結果的に非常におとる。

(5)助詞の使用をあやまることが多く、意味の関係が時折正確を欠く。

ろう児の知能は、以上の諸点で聴児よりも発達がおくれるが、このことから逆に、幼児の知能が、言語の使用ということによって、これらの諸点が特に推進されると考えられる。また一歳台の幼児は、言葉をつかえないチンパンジーとも特にこれらの点でことなっている。

なお、後天ろうの幼児について一言すると、純粋の意味で後天ろうといえるのは、約満四歳以後であるが、約満一歳から約満四歳までの早期失聴者に知能的な問題が多い。すなわち、字によるコミュニケーと発声が一致してこない。

これ以後の者は、文字と言葉が大体一致してくる。そして、一応言葉をつかいこなしていたから、文字だけに切りかえてもうまくつかえる。一方四歳以前の幼児期の失聴者は、文章を書いてもあいまいになり、助

詞や助動詞の使用がきわめて困難である。

なお、満一歳までの失聴者の知能については、先天ろうの子どもと大体差はない。

11　聴唖児の成長

幼児の知能と特に関係の深いものに聴唖の問題がある。

生理的発音障碍には、発音異常と発声異常があるが、これを併せて、構音異常という。ただし、通俗的には、発音を構音の意味につかっている。

構音異常の幼児のうち或る者は、満四歳頃になれば、障碍が大体治癒する。しかしその原因は不明なことが多い。

一般に、知能と関係のあるばあい、すなわち、精薄性の構音障碍は、三歳半乃至五歳ぐらいで、それ以前にくらべていちじるしく障碍がとれてくる。

聴唖はかならずものが言えるようになるから心配しなくてもよいという人があるがそれは、精薄性構音障碍や性格の異常や後にいう発音障碍のことを考えているのであろう。尤も、耳がきこえるが全然ものをいうことが出来ないおとなに、筆者はであったことがないし、そのような人を実際にみたという学者にも、いまだあったことがない。)

生理的発音障碍のうち或る者は四歳ぐらいで直るということは、発音障碍は四歳頃まで、たとえば精薄性の構音障碍かどうかというような、原因の見分け方の困難なことが多いということによる。

すなわち、生理的発音障碍の原因は、四歳頃まで不明なものが多い。軟口蓋の上り下りの運動の不完全、舌の異常、舌繋帯(舌の下についているひものような膜)がみじかすぎたり舌の先のほうにくっついているような異常、口蓋破裂、みつくち、歯列の異常、また扁桃腺やアデノイドが大きくて口の奥のほうをふさいでいるときなどは音声を発しうるが、語音(和音を抽象化したもの)を発しにくく、比較的、原因を把握しやすい。

しかし、軽度の聴力障碍になると、四歳頃までわかりにくい。また声帯異常の原因によるものも、四歳頃になるとわかる。そして、これらはいずれも満四歳以後も構音障碍をともなう。

しかし、これら以外の原因によるものは大体四歳頃に言葉が言えるようになる。これは何らかの原因で幼児前期に発音がおくれているのが、その原因にあたる機能が、子どもが成長するにしたがって次第に発達してきたためであると考えられる。その代表的なものが、知能遅滞や、以上のような原因がみつからぬ発音障碍(「かし行が言えなかったりする例)である。

そして、これらは大体満四歳頃を中心として障碍から脱することが多いのである。

×　×　×